

平家物語灌頂卷

女院出家

京に戻されたのち、建礼門院は、東山の麓にある吉田のあたりに住まうことになった。中納言法印慶恵という奈良の僧が所有している僧坊である。ところがその場所を訪れてみると、手入れもせず長らく放っておかれていた建物だったので、庭には雑草が茂り、軒端の草も遠い昔に誰かが暮らしていただろうことを思わせるだけである。簾はちぎれ、閨も外に晒され、雨風も防げそうにない。花がとりどりに咲き乱れてもそれを愛でる主はいない、月がきらびやかにさし込んだところでその美しさを詠じる人もいないという詩があるが、まさしくそのようなありさまなのである。かつては立派な屋敷で贅を尽くした華やかな暮らしをしていたのに、今はすべての身内を失って、粗末な茅屋に身を委ねることとなったのである。女院の心境は、傍目にも推しはかられて涙を誘う。陸に上がった魚、巢を失った小鳥とは、こういう心細さを言うのだろう。この境遇に比べると、そのころは辛くも思っていた船上生活さえもが恋しく思われる。「蒼波路遠」の詩のごとく、思いを西海の彼方、千里の雲に寄せ、苔むした陋屋の庭で東山にかかる月を見ては涙を落とすばかり、悲しいという言葉で語るには余りある。

女院は出家の道を選んだ。文治元年五月一日のことである。御戒の師は、長樂寺阿証房の印誓上人が務めたと聞く。御布施には、息子でもある先帝安德の直衣が選ばれた。入水の時に来ていた衣で、今も移り香は消えていない。形見の品として手元に残しておくつもりで西海から持ってきたものである。この先、どのようなことが起きても手放すまいと思っていたのに、それより他に御布施になる品物はなかったのである。この直衣を納めることで先帝の菩提を弔うことになればとの思いもあり、涙ながらに取り出したのであった。これを受け取った上人は言葉返すこともできず、ただ涙を流して御前より下がるしかなかった。その後、この御衣を幡に縫い直しては長樂寺の仏前に掛けていたとのことであった。

女院は十五で女御の宣旨を受け、十六で立后した。爾来、若き帝の傍らに侍り、公にも私にもお世話してきた。二十二の年に皇子をもうけ、その皇子が立太子、即位の運びとなるに伴い、院の尊号を受けて「建礼門院」と呼ばれるようになったのである。入道相国の娘であるうえに、天下の国母でもあれば周囲の手厚い待遇も並々のもではなかった。西海より連れ戻されたこの年、女院は二十九となっていた。桃李の装いと芙蓉の容貌、美しき喩えに用いられるこの形容が今の女院にもぴたりと当てはまるのだが、豪華に着飾ったところで、今の境遇ではそうすることに何の意味も見いだせない。遂には剃髪をしてしまったのである。

しかし、人の世を厭うて仏の道に入ったところで、嘆きが尽きることはない。身近にいた人々がもはやこれまでと諦めて次々と海中に飛び込んでいったときの様子、さらには母である二位の尼や先帝の面影は、いかばかりの時間がたっても忘れられそうにないと思われる。されば、はかない命をなんのために長らえてしまったのか、それゆえに世の憂き目を味わうのだろうと思いつづけていると、それだけで涙がこぼれてくる。夜が短い季節でも静かに眠って朝を迎えることはできな

い。ほんのちよっとうたた寝をすることもなければ、栄耀栄華の昔を夢の中にさえ取り戻すことはない。白詩の「上陽白髮人」には「夜長くして寝ぬることなく天明けず、耿耿として残んぬる灯の壁に背きし影、蕭々として暗き雨の窓を打つ声」とあるが、女院の部屋の壁を照らしている灯火の微かな燃え残りや、夜通し窓打つ雨の寂しさは、詩の世界のままである。むしろ上陽宮に幽閉されたかの人の悲しみも女院の孤独には及びはしないだろう。

愛おしい人がいたころを思い出すすがにということなのか、かつての主が植えていた花橘が軒の近くにある。香りを乗せて風が心地よく吹き、山ほととぎすが二声三声と鳴いている。女院は古歌ではあったが「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」の一首を思い出して、硯のふたに書き付けた。

ほととぎす花たちばなの香をとめて鳴くは昔の人や恋しき

二位殿や越前の三位の上のように気丈ではなく、水の底に沈むことのできなかつた女房たちは、情けをわきまえない源氏方の武士に捕らえられて京都に連れ戻された。若き人も老いた人も尼の姿となり、みすぼらしい出で立ちとなった。人とも思われない様子で、栄華の時代には想像もしないうらぶれた隠れ家に世の視線を避ける日々を送っている。暮らしていた屋敷はすべて失われた。何もない野原だけが残り、草むらばかりの場所であれば羽振りのよかつたころに親しかつた人は訪ねてくることもない。仙界から戻ってみると七代後の子孫に時代だったという故事も、このようなことなのだろうと思うにつけ、しみじみと感じられる。

折しも、七月九日の大地震で築地も崩れ、もとより荒廃していたところも倒壊しては、それまでに増して暮らしゆく手だても失われた。かの「上陽白髮人」にいう「緑衣の監吏、宮門を守る」どころか、そんな衛士などもいるはずがなく、荒れ放題の垣根は野原よりも露を蓄えてしまう始末である。秋が来るのを待っていたかのように虫の音が聞こえるようになると、その恨みがましい響きも胸にも染みわたる。夜が次第に長くなるにつれ、ますます寝覚めがちとなり、穏やかに朝を迎えることもできない。募る思いに秋の心細さが拍車をかけるので、悲しみも抑えきれない。何事も変わり果ててしまうのが憂き世のならい、草が枯れていくように、ほんのわずかの縁者までもが疎遠になってしまつて、誰が女院のお世話をしているのかさえもわからないありさまだった。

大原入

それでも冷泉大納言隆房卿や七条修理大夫信隆卿の北の方は、人目を忍びながらも次第に顔を見せるようになってきた。「あの方々のお情けがなければ生きていくことができなくなるなんて、その昔は考えたこともなかつた」と女院が涙を流すと、周りの女房たちもみな袖を濡らすのである。

いま暮らしている茅屋も、やはり京内に近く、道行く人の目にとまることも少なくはなかつた。女院は、先のない命が尽きるまでのわずかな間であれば、いろいろと心に刺さる世の噂なども届かない場所、深い山奥へ入つてしまいたいとは

思うのだが、別業のような住まいを用意してくれる縁者もない。御前にいた女房が進みでて言うには、「大原山の奥、寂光院というお寺は、静かなところだという話ですが」。

その話を聞いて、女院は「山里は物寂しいところなのでしようが、都近くの辛い場所よりは住みよいことでしょう」と言って、大原への隠遁を決めたのである。大原に入るにあたっての御輿などは、隆房卿の北の方が用意してくれたとのことである。

そして文治元年の九月の末に、その寂光院へ入御する運びとなった。寂光院に向かう道すがら、周囲の山々の梢がとりどりに色づいているのをご覧になりつつ歩を進めた。そうこうして大原に到着したころには、その場所が山陰にあたっていたせいなのか、日は早くも暮れかかっていた。晩鐘の音が寒々と響き、踏みかける草むらの露も多い。それにつられるかのように、ますます涙も募ってくる。風が激しく木の葉が吹き舞っている。空がどんよりと暗くなり、いつの間にか時雨れがちの気配である。あわせて鹿の声かすかに届き、恨みがましい虫の声が絶え絶えに聞こえてくる。ともかくにも、集めてきたかのような心細さは、ものの喩えで言い表すこともできない。浦伝い、島伝いの暮らしが続いていた折りも、寂しいの辛いと言いながら、それでもこれほどのことはなかったのと思うのも、ひどく悲しいものである。寂光院は岩も苔に被われた荒涼たる場所だったので、女院はここで暮らしたいと思った。露を乗せた庭の萩も霜枯れた様子。垣根に生えた野菊もまばらになっている。草木のそんな衰え気味の色を見て、きっと女院は自身が身の上を思いやったことだろう。

本堂の仏の御前で「天子聖霊成等正覚、頓証菩提」と唱えても、安徳の面影がぐっと胸に迫る。女院にとつて、その姿はいつになっても忘れるはずのない映像なのである。寂光院の傍らに方丈の庵室を建てて、一間を寢室に、そして一間を仏間と定め、昼夜分かたずに念仏を唱えて日々を過ごしたのであった。

十月の十五日の夕暮れ時、庭に散った檜の葉をカサリと踏みしめる音がする。「世を厭う者の住まいに誰が訪ねてきたりするのでしよう。誰か見てきてください。姿を隠さなければならぬのであれば、急いで隠れましょう」といって女房を見にやらせたことがあった。すると、それは小鹿が通ったに過ぎなかった。女院が、「どうでしたか」と尋ねると、大納言の佐殿は涙をこらえて答えた。

岩根ふみたれかはとはんならの葉のそよぐは鹿のわたるなりけり

女院はしんみりとした思いで、窓の小障子にその歌を書き留めた。

こうした日々を送る中において、何かの喩えであるように思われる事どもは、辛い中にもたくさんある。軒端に並ぶ木々は極楽浄土の七重宝樹、岩間を溜まる水は八功德水。人の世の無常は春の花であり、風に吹かれてはすぐに散る。定めあるこの世は秋の月で、雲に隠れてもう見えなくなっている。その昔、かの承陽殿のような御殿で花に囲まれていた朝は、一陣の風に消えてしまった。長秋宮を思わせる宮殿で月を眺めた夕べは、すでに雲に被われて光りを失った。昔は玉の御殿に錦の夜具を並べての麗しき暮らしぶりだったのに、今では枯れ木で編んだ庵で暮らしているのである。周りに仕える女房たちも、ただ涙するばかりである。

大原御幸

文治二年の春の頃、後白河法皇は建礼門院が大原で閑居をしている暮らしぶりを見たくなったが、二月三月のころは風が強く、寒気も残っている。山々の雪や谷間の氷も溶けてはいない。それで春が過ぎて夏になったころ、賀茂の祭も終わったので、法皇は夜も明けきらないうちに御所を出て大原の奥への御幸を行った。お忍びの御幸だが、身辺の従者、徳大寺殿、花山院殿、土御門殿以下の公卿六人、殿上人八人、北面の武士たち少々がお仕えした。鞍馬街道を経ての御幸で、途次、かの清原深養父が隠棲した補墮落寺、小野の皇太后宮ゆかりの旧跡を廻り、そこから先は輿に乗った。遠くの山々にかかる白雲は、散ってしまった桜の花を思わせる。青葉に見える桜の梢には、わずかに花が残り、過ぎにし季節が惜しまれる。時は四月の二十日過ぎ。夏草が茂っている草むらに分け入っていくと、そういう場所には未だかつて来たこともないので、見慣れている物など何もない。人の行き来も途絶えているところなのだろうと思われて、心が痛むのである。

西側の山の麓に一軒の御堂がある。まさしく寂光院である。古めかしくしつらえてある池や植木など庭のつくりは由緒ありげである。「薨やぶれては霧不断の香を焚き、枢落ちては月常住の灯火をかかぐ」とあるのは、このような場所をいうのだろう。庭の若草がほうぼうに茂り、青柳の糸が風になびいている。池の水草が水面に漂い、錦を晒しているかと紛うほどである。中島の松に垂れかかる藤波の微かな紫に染まった色、青葉の混じる遅桜、それらは初花よりも新鮮味がある。池のほとりの山吹は盛りを迎え、雲の絶え間から山ホトトギスの一声。見る物、聞く物すべてが法皇のお出ましを待っていたかのような風情を漂わせている。法皇はあたりの様子を見て、心に感慨を繰り返した。

池水のみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

古めかしい岩の間から流れ落ちる水の音までも謂われがあるかのようなところである。間近に見える緑の蔦が絡まる垣根、遠くに見える眉墨を引いたような山々の様子、絵に描こうにも筆が及ばない。

女院の部屋に目を移すと、軒には朝顔の蔦が這い上がっていたり、忍ぶ草まじりの忘れ草が絡まっているのも、人目を忍び、憂き世を忘れたいとの思いが現れている。清貧の暮らしぶりを詠んだ漢詩「瓢箪屡空、草滋顔淵之巷」云々というのも、このようなありさまをいうのだろう。屋根を葺く杉板にも隙間が目立ち、時雨だろうと、霜だろうと、はたまた露だろうと、防ぐことができそうにもない。きっとすべてのものが月の光と競い合うように室内に入っているにちがいない。庵室の後ろには山が迫っており、前には寒々とした野辺が広がって、風が通ると笹が揺れる。世捨て人の常とはいいながら、「うきふししげき竹柱」といって、竹に節が多いのと同じく、日々の暮らしにも悲しいことばかり。あるいは「間遠に結へる籬垣」というように、編み目の粗さは、さながら都からの便りが間遠になって届かないさまを暗示している。わずかに聞こえてくるものといえば、峰の木々に響く猿の声であり、木こりが枝を打つ斧の音。これらを訪れる人に数えないとすれば、この庵にやってくる人など皆無なのである。

法皇は「誰かいのか」と人を呼んでみたが返事はない。それでもかなり時間がたってから、老いさらばえた尼が一人、姿を見せた。「女院はどこかへおでかけなのかな」と尋ねてみると、「この上の山へ花摘みに」。

「その程度のこともお世話してあげる人がいないのか。世を捨てた身とはいいいながら、劳しいことだ」。

「五戒・十善の御果報はすでに尽きてしまいました。さらば今はこのようなありさまになっておられるのです。捨身の行にいったい何の劳苦を厭いましょうか。因果経は、すべては因果の巡り合わせ、この世における境遇は前世にその種があり、来世における暮らしは今の現世にその種が蒔かれていますと教えています。過去と未来の因果を知っておいでであれば、この暮らしを悲しんだりはいたしません。悉達太子は十九の歳に伽耶城を出て、檀徳山のふもとで木の葉の衣を身にまとって肌を隠し、峰に上って薪をとり、谷に下って水を汲みました。その難行苦行の功德によって、ついに悟りの境地に到達されたのです」。

そう語る尼の姿を見てみると、何の生地かもわからぬものを継ぎ合わせた衣を着ている。みすばらしい姿なのに、このような奥深い言葉を口にできるとは不思議なことと思つて、法皇は「そもそも御前はいかなる者か」と尋ねてみた。すると、最初は涙をこぼして答えようともしなかったのだが、ややあつて涙をこらえつつ、「このようなことを申し上げるのも恐れ多いのですが、故少納言信西入道の娘、阿波の内侍と呼ばれていた者でございます。母は紀伊の二位は厚いご配慮もいただいておりますのに、法皇様も見忘れておられる様子、されば身の衰えを思い知らされて、どうしようもなく辛く思われてしまいます」。そう言つて、袖を顔にあてて涙がこらえられないでいる姿は、静かな気持ちで眺めることもできない。

「阿波の内侍だったのか。昔の姿からは思いよりもしなかった。まったく夢のような話だ」と、法皇のほうも涙が止まらなくなつてしまった。お供の公卿や殿上人たちも、「不思議なことを言う尼かなと思つてはいたが、阿波の内侍であればさもあらん」と言つて、おのおの語り合つた。

院内の様子をあちらこちら見て回ると、庭の草には露が重たくかかり、垣根に依りふしている。その近くの田には水が張られており、「鳴立つ沢」と詠われる美しい風景にも見えない。女院の庵室に入つて障子を開けてみると、一間には来迎三尊が祀られている。中央の阿弥陀如来の手には五色の糸が掛けられ、左には普賢菩薩の画、右には善導和尚と先帝の御影、そのほか、法華経八巻と善導の五部九巻が置かれている。そして室内には、かつての女院が焚きしめていた蘭麝ではなく、お香の煙が立ち上っている。かの浄名居士は、靈力を使い、方丈の間に三万二千の床を並べて無数の仏像と安置したというが、女院の志があふれているこの庵室にもそれに通じる雰囲気が漂っている。障子にはいろいろな経典からの真言が色紙に書き抜かれて貼られている。その中の一枚に、大江貞基法師が清涼山で詠んだという一句「笙歌遙聞孤雲上、聖衆来迎落日前」がある。少し離れたところには女院の御製と思われる一首がある。

おもひきやみ山の奥にすまひして雲居の月をよそに見んとは

傍らの一間に目を移すと、そちらは寝室らしい。山から切り出してきたのだろう、竹を組んだ竿に麻の衣や紙の衾が掛けられている。本朝・漢土の美々しき品々を数々取り集めて贅を尽くしていた往年の装いも、すっかり夢となってしまった。法皇の付き従っている公卿や殿上人たちも、かつての栄耀栄華を目の当たりにしてきただけに、その姿がありありと思ひ浮かべられては涙を禁じ得ない。

そうこうしているうちに、山の上から濃い墨染めの衣を着た尼二人が、岩間の道に手を焼きながら下りてきた。法皇はそれに目をやって「あやつらは何者だ」と尋ねると、老尼は涙を抑えつつ答えた。

「花かごを肘に掛け、岩躑躅を手を持っておられる方が女院でございます。薪や蕨などを抱えているほうは鳥飼の中納言維実の娘、五条大納言国綱卿の養女となつて先帝の乳母としてお仕えしていた大納言の佐でございます」と、その言葉も言い終えないうちに、涙を流すのである。

あまりの姿を目の当たりにしては、法皇もこみ上げてくるものが抑えられない。崖を下りきつたところで、あつげにとられた面もちで立ちすくむ法皇の姿に女院はようやく目を留めた。たとえ世を捨てた身とはいえ、あまりにも浅ましい姿を法皇に見られてしまった恥ずかしさ、女院は即座に消えてしまいたいとも思うのだが、どうしようもない。毎晩汲んでいる關伽の水のため、袂のあたりもじつとりと濡れており、くわえて明け方早くから山に入っていて山路の露で湿らされた出で立ちには、乾かすこともできはしなかつたのだらう。惨めな姿のまま、山のほうへ逃げ帰ることもできず、部屋の中へ入ることもできない。流れ落ちる涙をとどめることもせず、ただ呆然と立ちすくんでいるところに内侍の尼が近寄つて、そつと花かごを受け取るのであつた。

六道之沙汰

「粗末な姿など世捨て人にとつては当たり前のこと、何を恥じることがありません。早くご対面なさつて、法皇様にもお帰りいただきたいほうがよろしいのでは」と阿波の内侍が言うので、女院も庵室へ入つていった。

「一念の窓の前には撰取の光明を期し、十念の柴の柩には聖衆の来迎を待つ思いで、日々、お迎えをお待ちはしていますが、法皇様がお見えになるとはまったく思ひの外のことでした」と言つて涙ながらの対面となつた。法皇はその姿を見て、語りかける。

「三界の最上に到ると八万劫の生命が与えられるというが、それでも必滅の憂いが訪れる。天人たちが暮らすという欲界の六天においてさえ五衰の相から逃れるわけにはいかない。善見城や中間禪の高台にしても同じこと、夢の中で果報と巡りあい、幻のうちで楽しみを享受しているようなもの、いかなる者も流転無窮の宿命に背くことはできない。さながら車の輪が回り続けているようなものだろう。あなたもまさに今、天人五衰の悲しみに向きあつておられるのだらう」。さらに続けて、こうも言った。

「それにしても、この庵にはどなたか訪ねてこられるのかな。昔のことを思い

出す折りもあるうものを」

「こんな場所に来る人などおりません。隆房や信隆の北の方より時折言づてが届く程度です。その昔は、あの方たちのお世話になるなど思ってもおりませんでした」。女院の涙に、周りの女房たちもそっと顔を被っている。女院は涙をこらえて言葉が続けた。

「このような尼姿になることは、一時的な悲しみには違いありませんが、来世における悟りのためには喜びにも思えるのです。即座に釈迦の遺弟に名を連ね、ありがたくも阿弥陀の本願に掬いとっていただくことによつて、この世で女でいたことの苦しみをすべてから解き放たれました。今は片時も怠ることなく、六根を清め、一途に浄土を願っております。そうして西の海に消えた方々のご冥福を祈るとともに、ひたすら来迎の訪れその時を待ち望んでおります。それにしても、いつの世にも忘れがたいのは先帝の面影、忘れようとしても忘れられず、悲しみをこらえようとしてもこらえられません。親子の恩愛ほど悲しいものはないといいますが、彼の菩提のためにも朝夕の勤めは怠ることはありません。これもよき機縁、すなわち善知識というものでしょう」

「我が国は辺土の小国であるといえども、ありがたくも前世に積んだ功德のため、貴女は位を極めることとなった。国母の身分相応に何一つ心に満たされないことなどなかった。くわえて仏法が広く行き渡っている世に生まれて、仏道への志を持つこともでき、来世もまた約束されている。しかし、それにしても、人の情けのつれなさは今更驚くにも当たらないが、今の貴女の姿を見るにつけ、まったくもつてどうしようもない」

「何を仰るか。これも六道を巡っているようなものなのです。私は太政大臣平清盛の娘として天下の国母となったので、一天四海この世のすべてのことを思うがままにしておりました。朝拝の行われる年始より、衣替えの折りにも、仏名の折りにも、摂政以下の大臣・公卿にお世話していただくそのさまは、天道においてあまたの諸天眷属に取り囲まれているかのようなもので、この私を仰ぎ見ない者など誰一人としておりませんでした。清涼殿でも紫宸殿でも、私のいる場所は常に玉の簾の内、春は南殿の桜を愛でて日を過ぎ、夏の暑い日には泉の水と戯れて心を慰め、秋は帝のお側で月を眺め、冬の寒い夜には幾重にも衣を重ねて暖をとっております。玄宗皇帝と楊貴妃の故事にあるように、長生不老の術を願ひ、あるいは不死の薬を求めてでも、この幸福の長からんことばかりを願っていたのです。明けても暮れても享樂は尽きず、天上の果報もこれには及ぶまいとさえ思っております」

ところが、あれは寿永の秋の初め、木曾義仲とかいう者に怯えることとなりました。挙げ句、住み慣れた都は雲井の彼方に望むようになり、旧都福原には火をかけて焼野の原となして、一門の人々は、その昔、名のみ聞く須磨・明石という鄙の地で浦伝いの日々を送ることとなったのです。風光明媚の土地とはいいいながら、我らが命運の凋落は心に重たくのしかかってしみじみとした思いに暮れる日々でした。昼は広大な海原で涙にくれ、夜は浜辺の千鳥とともに泣き明かすこととなったのです。浦から浦へ、島から島へと漕ぎ渡り、いにしえの由緒が語られる地に到るにしても、都のことが思われてなりません。かくのごとく陸地にあがることもできない日々は、必ずや訪れる滅びの日に相対したときの悲しみ、すな

わち五衰必滅の悲しみかと思われたのです。愛する人との別れ、憎む者との出会いなど、人間道における苦しみも我が身の上に味わうこととなり、四苦八苦のすべて、余すところなく身を以て体験してまいりました。筑前の国の太宰府というところでは、某の維義とかいう輩によって九州からも追い出され、広い山野であっても我々が立ち寄ってくつろげる場所はどこにも見あたらないう境遇にまで落ちてしまいました。同じ年の秋の末になると、昔は麗しき宮中で観賞した月を、寒々とした大海原の上に眺めて過ごしておりました。そして十月ごろでしたでしょうか、『都では源氏に追われ、鎮西では維義に攻められるのでは、もはや網にかかった魚のようなもの、どこへ行っても逃れられるものか。もう先は望めまい』、清経中将がそう言って海に身を投げたのが、地獄の悲しみの始まりでもありました。

波の上での暮らし、船の内での夜、貢納の品などあるはずもなければ、食事にも事欠くありさまでした。たまたま食糧が手に入ったとしても、水がないので食事にはなりません。大海の上とはいえ、潮であれば飲むこともできず、これやまさに餓鬼道かとさえ思われたのです。そののち、室山や水島の戦いで勝利を得て、少しは落ち着いたのも束の間、一ノ谷という場所が多くが生命を落としてからは、直衣や束帯ではなく、常日ごろから鉄の鎧で身を固める日々、明けても暮れても戦場での鬨の声絶えなくなつたのは、阿修羅や帝釈天たちが闘争を繰り広げる修羅道もまさにこのような世界に違いないと思われたのです。一ノ谷で敗れてからといえ、親は子を失い、妻は夫に先立たれ、沖で釣りする小舟も敵も舟ではないかと怯え、岸辺の鷺までも源氏の白旗かと震え上がるようになったのです。

そして門司赤間の関は壇ノ浦、戦は今日が最後と見えたので、母である二位の尼は私に向かって言いました。『ここまで苦楽をともししてきた男たちが生き残ることは千万の一といえどもあり得ないでしょう。また遠く都にいる疎遠の者たちは、もしも生き残つたとしても、我らの後世を弔ってくれはしないでしよう。昔より戦場で女を殺すことはないと言います。おまえは是が非でも生きながらえなさい。そうして帝の後世を弔いなさい。我らを成仏に導くのです』。説き伏せるように語られたその言葉は、この世で聞くものではありませんでした。夢のような、どこか遠い世界からの響きだったので。そうこうするうちに、風が急に強くなり、雲が大空を厚く覆い隠し、男どもは狂った形相を見せるようになりました。天運が尽きては、人の力ではどうにもなりません。万事は決したと思われたのでしよう、二位の尼は先帝を抱きかかえ、船端に立ちました。先帝はまだ状況がわからず呆然としたご様子、『尼御前よ、われをどこへ連れて行くんだ』と尋ねておりました。幼い先帝に向かって二位の尼は涙を抑えつつも答えました。

『まだおわかりではないのでしようね。前世によき行いを積んでこられたおかげで、この世では帝王の位にお生まれになったのに、ちょっとした悪縁に引かれて現世での命運が尽きてしまったのですよ。まずは東に向かって伊勢の大神宮様にお別れを申し上げなさいませ。それから西方浄土の来迎におすがりすべく、西に向かつてお念仏を唱えなさいませ。現世のこの国は、世界の片隅にある小さな国、生きるのも苦しい国でした。これから向かうところは、極楽浄土といつて、それはそれはすばらしい場所なのです。その極楽浄土へお連れいたしましょう』。

山鳩色のお召し物をまとい、びんづらを結った先帝は、涙をこぼして小さな美

しい手を合わせました。最初に東を伏し拝んで伊勢大神宮に別れを告げ、それから念仏を唱えました。そうして二位の尼は先帝を抱きかかえたまま、水底へと沈んでいかれたのです。そのときの面影は、たとえ目が見えなくなっても、あるいは心が惚けてしまったとしても、忘れることはありません。思い出すまいとしても、自ずと浮かんでくるお姿なのです。船上に残された女たちは声の限りに呻き叫んでおりました。地獄道で炎に苦しめられる罪人たちがあげるといふ阿鼻叫喚もあれほど心をかきむしる悲痛なものではなからうと思われませう。

それから源氏方に捕らえられ、都へ連れてこられるときのことでした。播磨の国は明石の浦でわずかにまどろんだ夢の中、昔の内裏よりもはるかに美しい場所におられる先帝をはじめ、一門の方々をお見受けしました。公卿・殿上人皆々方は威儀を調えた立派なお姿でおいででした。都を追われてからこの方、そのような場所を見たこともなかったのです。『ここはどこなのでしょうか』と尋ねると、二位の尼と思われる方が、ここは竜宮城と答えてくれました。『すばらしいところなので、ここには苦しみなどはないのでしょうか』と問えば、尼は再び答えてくれました。『この様子は童畜経の中に書かれております。我らの後世はよくよくお願いしましたよ』と。夢から覚めた後は、以前にもまして経を読み、念仏を唱えて、皆々の菩提を弔っているのです。私が歩んできたこれらの道は、すべてが六道のことだったのに違いありません。

そこまでの語りを聞いて、法皇は「かの国の玄奘三蔵は、悟りの前に六道を見たという。我が国でも日蔵上人は蔵王権現のお力によって六道を巡ってきたこと。貴女がこれほどの世界を目の当たりにしてきたのは、実はすばらしいことだったのではないだろうか」と言い、そっと臉のあたりを抑えるのであった。二人の話を聞いていた公卿・殿上人をはじめ、女院にお仕えしている女房たちもみな、袖を濡らしていた。

女院死去

寂光院の鐘が鳴り響き、一日に終わりを告げている。夕陽が西に傾くと、法皇は名残を惜しくも思われたが涙をこらえて都へと帰っていった。女院は今更のように、往時を思い浮かべて、こらえきれない涙を持ってあましている。法皇の一行を遠くに見送り、その姿も見えなくなると、女院は本堂に入って本尊に向かった。そうして「先帝聖霊、一門亡魂、成等正覚、頓証菩提」と涙ながらに祈る。かつては東に向かって「伊勢大神宮、正八幡大菩薩、天子宝算、千秋万歳」と、伊勢大御神に帝の長寿を祈っていたのに、今は西に向かって手を合わせ、「過去聖霊、一仏浄土へ」と失われた一門の供養に心を尽くすのは、悲しみの限りでもある。寝室の障子に書き付けがある。

このごろはいつならひてかわが心大宮人の恋しかるらん
いにしへも夢になりにしことなれば柴のあみ戸もひさしからじな

法皇のお供をしていた後徳大寺実定公が庵室の柱に書き付けたという歌もある。

いにしへは月にたとへし君なれどその光なき御山辺の里

これまでのこと、これからのことなど思い続けて涙にむせんでいた、ちょうどそのとき、山ホトトギスの声が響く。

いざさらばなみだくらべん時鳥われも憂き世に音をのみぞなく

そもそも壇ノ浦で生け捕りになった人々は、都大路を引き回されたうえで首を刎ねられるか、さもなくば妻子から引き離されて遠流の沙汰となった。男どもの中では、池の大納言平頼盛以外は一人も助命はかなわなかった。それでも四十人あまりの女房たちの処遇は、過酷なお咎めもなかったのも、親類縁者のもとに預けられることとなった。平家一門においては、玉の簾の内にも風静かならず、柴の柩も塵収まらずというように、位のある者なき者を問わず、この年月の騒動を平穩に過ごしおうせた者はいなかった。枕を並べていた夫婦は離ればなれとなり、手塩にかけて養ってきた子供、厚く面倒を見てきた親、それぞれに行方もわからず散り散りになってしまった。別れの悲しみは尽きはしないが、人々は涙のうちにその日その日を送るのであった。このような顛末となったのは、すべては入道相国清盛公が天下を我がものにしてから、上は帝も恐れず、下は万民を顧みない振る舞いを繰り返したからである。意に背く者に対しては、死罪だの流刑だのと、好き放題に処置し、何人をも憚りはしなかった結果なのである。先祖の罪業が子孫に及ぶという条理はまことのことだったようだ。

そうして、幾年かを過ごしていたところ、女院は心地のすぐれない日々が続いた。本尊の手に五色の糸を掛けて「南無西方極楽世界、教主弥陀如来、かならずお迎えに来てくださいませ」と、念仏を唱える女院の左右には、大納言の佐や阿波の内侍が控えて、今生の別れを知って声の限りに泣き悲しんでいる。念仏の声が次第に弱くなっていくと、西に紫雲がたなびき、芳香が庵室内に満ちあふれてきた。そして空からは妙音が響きわたってきた。人の命は限りあるというもの、建久二年の二月の中旬、建礼門院徳子はその生涯を閉じた。最後を看取った女房たちは、後の位に上りつめたとき以来、西海をさすらっていたときも、そして大原に隠れ住んでいたときも、ずっとお側に仕えていた者たちである。おのおのが抱く別れ路の悲しみは、どうしようもないほど深いものだったことだろう。この者たちは、源氏の世である今日では、華やかなしりころの知り合いとも疎遠になり、身寄りもない者たちではあったが、それぞれに仏の道に入っていた。女人の身にして悟りを得たという童女や韋駄希夫人の故事のごとく、これらの人々は極楽浄土への往生を遂げたと伝えられている。